（別紙　２）

論文審査の結果の要旨

氏名　　今野　喜和人

１８世紀後半のヨーロッパ、とりわけフランスで流行した「イリュミニスム」の代表的思想家であり、「知られざる哲学者」と自称したサン=マルタン（Louis-Claude de Saint-Martin, 1743-1803）は、フランスのロマン主義文学及びドイツのロマン主義哲学に大きな影響を与えたことで知られるが、その著書の難解さ、イリュミニスムに纏わるオカルティズムの色彩が災いして、これまで正統的な文学史、思想史からは排除されてきた。本論文は、この特異な思想家に関する日本ではじめての本格的研究であり、「啓蒙の世紀」と呼ばれるフランス１８世紀に、なぜサン=マルタンという「神秘思想家」が生れたのか、また彼自身は啓蒙とその帰結―あるいは破局―であるフランス革命に対して自らをどのように定位したのかを、同時代に向けた彼の言説の検討、およびイリュミニスムと関わる他の著作家との比較を通じて解明することを目指している。その過程で啓蒙と反啓蒙、１８世紀の合理主義精神と古代以来の神秘思想の関係が考察され、両者の間には単なる対立・衝突のみならず、様々な相互浸透や混交が見られ、それがロマン主義成立の一つの契機になったことが示される。本論文は、サン=マルタン研究であると同時に、１８世紀後半から１９世紀前半にかけてのフランス精神史の見取り図を描き出す試みでもある。

まず序論で、イリュミニスムの概念を歴史的に概観し、本論で用いる「神秘思想」関係の用語について説明を与えた後、サン=マルタンの「人と作品」について手短な紹介を行う。本論は、２部に分かれ、第１部は、「啓蒙からロマン主義へ」と題して、ルソー、イデオローグの代表的論客ガラ、シャトーブリアン、バルザックの思想と著作との比較を通じて、サン=マルタンの「神秘思想」が啓蒙の合理主義、当時のカトリシスム、さらにはロマン主義と取り結んでいた関係を検討すると同時に、翻って比較の対象である著作家たちの特質を浮き彫りにする。その際、導きの糸になるのは、言語と自然の観念である。「神秘思想家のフランス革命」と題する第２部は、サン=マルタンの革命観を、彼の二つの著作『革命についての手紙』及び『クロコディル』の紹介と分析を通じて考察する。さらにその成果を踏まえて、彼の周辺にいた二人の「イリュミネ」ニコラ・ド・ボンヌヴィルとジャック・カゾットの正反対の革命観を検討し、彼らに帰せられている「マルチニスム」がサン=マルタンの本来の思想とは無縁であることを示して、革命とイリュミニスムの捩れた関係に再考を促す。

本論文は、サン=マルタンの著作はもとより、イリュミニスムに関わる思想家・文学者の著作を渉猟して、サン=マルタンの思想の輪郭を確定するにとどまらず、イリュミニスムという観点から、啓蒙主義からフランス革命を経てロマン主義の勃興に至る時代思潮に新たな光を投げかけることに成功している。広範囲の著作家との対比に力点を置くあまり、サン=マルタンの思想と信仰の核心が必ずしも明確に浮かび上がらず、また立論の主導動機である「神秘思想」に対する論者のスタンスにいささかの揺れが認められるという問題は残すものの、これまでほとんど知られなかった思想家の全容に光を当て、時代思潮との関連を明らかにしたことは、まことに独創的な成果である。以上から審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。